

2025 年度
社会福祉学科
総合型選抜入試課題

次の課題A・B・Cから1つ選び、各課題の指示に従って述べなさい。

注意事項

○手書きの場合

課題レポート記入用紙にペンで記入しなさい。

○パソコンで作成する場合

下の要領に従って作成すること。

- ・ A 4 縦の横書き。1 枚。
- ・ 1 行目に選択した課題の記号、氏名を書く。
- ・ 本文については 1 行 4 0 文字の 2 0 行で作成。

【A】

子ども自治会発足 壱岐・芦辺地区で地域活性化へ 「自分ごと」として行動

長崎県壱岐市芦辺町の芦辺地区まちづくり協議会（國村勉会長）の「子ども自治会」が発足し、活動を始めた。子どもたちが自ら地域の「活性化策」を考え、実現に向けて取り組んでいく。

子ども自治会の結成は、まちづくり協議会が子どもたちに提案した。「自分たちがやりたいことは自分たちで考えてやってみる」がコンセプト。小中高校生17人で構成する。

子どもたちがさまざまな経験を積み、社会性を育むことが目的。家庭や学校で体験できないことに挑戦したり、年齢や立場の違う人の意見を聞いて新たな視点で考えたりすることを重視する。自分の役割に責任を持ち「自分ごと」として行動する姿勢を養う。

最初の活動として5月26日と31日にワークショップを開き、子ども自治会でやってみたいプロジェクトについて、メンバーが意見を出し合い、発表した。

プロジェクトの候補として、バスケットボールやバレーボールができる広場▽猫と触れ合えるカフェ▽海辺でのバーベキューやビーチバレー▽壱岐の魚を集めた水族館—など、今の地域にない6プランを選んだ。今後、LINE（ライン）での投票で三つに絞り、子どもたちの中からリーダーを決め、年内実現に向けて取り組みを進める。

水族館づくりを提案した市立芦辺中2年の墨優仁さん（13）は「自分たちで一から考えることはなかったのが面白い。みんなが喜んでくれるように頑張りたい」と張り切っていた。

（出典：「長崎新聞」2024年6月6日より）

課題

上の記事では、「子ども自治会」でやってみたいプロジェクトについて、「壱岐の魚を集めた水族館づくり」などが提案されています。あなただったら自分が住んでいる町のためにどのようなプランを提案したいですか。また、そのプランを現実化するための具体的な実施計画を700字以上800字以内で述べなさい。

【B】

医療的ケア児 成人後も手厚い支援が必要だ

日常的に医療面での介助が必要な「医療的ケア児」と、その家族が生涯にわたって安心して暮らせるようにすることが大切だ。社会的な理解を広げ、支援を充実させたい。

医療的ケア児は、人工呼吸器の使用や痰の吸引などの医療行為を必要とする子どものことだ。全国で2万人を超えると推計され、この20年ほどで倍以上に増えた。背景には医療の進歩がある。出産前後の医療技術の向上で、難病や重い障害を持つ赤ちゃんを救命できるケースが増えたためだ。2021年に医療的ケア児と家族を支えるための法律が施行された。体制整備は徐々に進んでいるが、まだ課題は多い。

小中学校などへの看護師の配置が不十分で、医療的ケア児の学校生活に保護者の付き添いが必要となるケースが、全体の2割に上っているという調査結果がある。国は、人員配置の経費を自治体に補助しているが、人手不足で常勤職員の確保が難しいとされる。各地にある訪問看護ステーションを活用し、看護師の派遣を受けることなども検討してはどうか。

医療的ケア児には重症の心身障害がある子どもが多く、介助する家族の中には、十分な睡眠や休息さえ取れない人が少なくない。疲弊した家族に休息をとってもらうため、医療的ケア児を一時的に預かる施設もある。国立成育医療研究センターの敷地にある「もみじの家」は、看護師が常駐していて宿泊ができ、子どもは遊びや学びを楽しめる。各地に同様の施設を増やしたい。

支援法は3年をめどに見直すとされており、今年がその年にあたる。課題を洗い出して、さらなる拡充を検討してほしい。家族の負担軽減には、企業の役割も重要になる。従業員に対し、テレワークの活用や、時短勤務の導入などで、ケアと仕事を両立できるように後押しすべきだ。

学校を卒業する18歳以降になると、居場所が見つからないという状況も改善する必要がある。障害者を対象にした通所施設などは、医療的ケアが必要な人は受け入れていないことが多く、家族は将来に不安を抱えている。成人した後に本人や家族が社会との接点を失い、孤立するような事態は避けねばならない。

災害時の備えも、平時から準備しておきたい。医療機器や薬が欠かせない医療的ケア児は、一般的な避難所生活が難しい。どこへどう避難するか、事前に計画を立てておくことが欠かせない。

(出典：読売新聞オンライン 2024年5月9日より)

課題

医療的ケア児が健やかに暮らせるためには、どのような環境の整備が必要だと考えますか。あなたの考えを700字以上800字以内で述べなさい。

【C】

吃音をプラスのイメージに 5月に長崎で当事者接客カフェ 諫早出身の学生も挑戦 「体験共有を」

話し言葉が滑らかに出不い発話障害の一つ、吃音（きつおん）の若者が接客スタッフを務める「注文に時間がかかるカフェ（注カフェ）」が5月5日、長崎県長崎市内で1日限定でオープンする。東京の当事者が発起人となって始めた期間限定のイベントで、全国各地に広がっている。スタッフに挑戦する諫早市出身の佐賀大2年、辻勇夢さん（19）は「吃音に対してもっとプラスのイメージを持ってもらえるよう自分の実体験を共有できたら」と心待ちにする。

「意識するのは人前で話す時とか。幼い時から『なんで言葉が突っかかるんだろ』と思っていた」

小学校に入学した辻さんが学級で自己紹介をした時だった。言葉に詰まり、教室内で笑いが起き、泣き出してしまった。その後、からかわれることは直接なかったが、周囲の目が気になり、ネガティブな気持ちを抱えながら学校に通った。

転機となったのは高校進学。入学直後に部活動の同級生に初めて吃音のことを打ち明けた。「俺は味方やから」「大丈夫よ」。先輩など周囲も理解してくれ、辻さん自身も個性として前向きに捉えられるようになった。

携帯電話を持ったことも大きかった。交流サイト（SNS）で自分と同じ吃音の人が頑張る姿に触れ、社会人になってからの緊張する場面での対処法も知ることができた。そうした中、高校3年生の春、注カフェの存在を知った。

吃音当事者の奥村安莉沙さん（32）＝東京都目黒区＝が2021年に始めた取り組みで、高校生以上の学生が接客スタッフを務める。接客を通じて学生が自信をつけ、客として参加した人に吃音への理解を深めてもらうことで、社会参加を促進しようという試みだ。

固定の店舗はなく、奥村さんがインターネットなどでスタッフを募集。クラウドファンディングで集まった資金を基に期間限定で開く。全国23の都道府県で開催され、本県では初めて。

「大学生になったら体験したい」。そうした思いを抱いていた辻さんは大学進学後の昨年8月、福岡市内で開かれた注カフェに客として参加。同世代の若者が前向きに取り組む姿に感動を覚え、「生まれ育った長崎で開きたい」との思いを膨らませた。昨年12月、スタッフに応募。会場の提供先も決まり、スタッフとして参加する京都府在住の女子高生や奥村さんと準備を進める。

辻さんは「吃音について理解してくれるという信頼感や安心感がある。緊張よりわくわくの方が大きい。楽しめたら」と笑顔で語った。

（出典：「長崎新聞」2024年4月12日より）

課題

吃音のある人はどのようなことで「生きづらさ」を感じているかを述べた上で、「注文に時間がかかるカフェ（注カフェ）」の果たす役割について700字以上800字以内で述べなさい。

